

第 2 回 東北地方コンパクトシティ検討委員会 議 事 要 旨

日時：12月12日（火）13：00～16：00

場所：東北建設協会3階会議室

【 全 体 討 議 】

～ モデル都市におけるコンパクトシティの検討 ～

- （委 員）東根市長瀬地区は一種の環壕集落（堀で囲まれた要塞集落）であり、独自の世界観を持っている。このような個性を持った集落に対し景観や歴史への配慮が必要ではないか。
- （事務局）城跡に市街地（集落）が形成された地区として、長瀬地区と東根本町地区がある。ともに道路が狭く除雪車も中に入れないなどの問題を抱えており、除雪体制のあり方が課題となっている。また、歴史的資産も残されているため、それらの活用方法や維持管理についても検討が必要。
- （委 員）横手市の都市施設の分布状況（事務局資料 p.33）で、人口100人のエリア（ で図示）が北西部に広く分布している。これは農村集落が分散しているためだと思われるが、このような集落が今後どうなっていくか将来予測が必要ではないか。
事務局資料 p.38 のように、旧村単位で集落を再編する手法は従来から考えられてきたところだが、学校も病院もないような地域の行政サービスをどう考えるか。従来の手法とは異なる地域の運営手法が必要なのではないか。
- （事務局）農村集落の人口は今後減少していくことが予測されるが、昭和の合併前の旧村拠点はある程度存続していくものと考えている。
- （委 員）横手市の周辺に存在する集落は農業を支える重要な拠点である。横手市の市街地部だけではなく周辺の農村部をもう少し丁寧に分析する必要がある。
合併前の旧増田町では今でも朝市が開催されており、(旧)横手市の人も買い物に訪れている。
- （委 員）中小都市は周辺農村部と大都市とを結ぶ（中継媒介）拠点として形成された。これ以上農村部を無視すると、ますます中小都市は衰退していくと思われるので、農村部を詳しく分析した上でコンパクトシティ像を描くことが重要。

(委員) 事務局資料は合併前の行政単位で作成されているが、ここで考えるコンパクトシティは合併前の行政単位で考えるのか合併後で考えるのか。

(事務局) 合併前の行政単位で考えている。

(委員) 旧増田町はコミュニティがしっかりしており大変元気だが、買い物などではどうしても旧横手市に来なければならない。合併前の周辺町村と旧横手市の依存関係が分かる資料はあるか。

(事務局) 横手市については、事務局資料 p.32 に買い回り品の依存状況を示しているが、合併した周辺町村を太線で囲むなど改めて整理したいと思う。

(委員) コミュニティの維持再生について、都市と農村の交流について記述してあるが、まちづくりに取り組んでいるNPOやTMOなど都市部の中におけるコミュニティの記述も必要ではないか。

(委員) 人口5万～10万人程度の都市は完全に自律できない。

広域合併をした市は、合併によって全ての都市機能を備えることができると考えているのか、そうではなく周辺都市との機能分担を考えているのか。この点がコンパクトシティを考える上で重要なポイントである。合併した市町村を見ていると、フルセット主義(あの施設もこの施設も欲しい)が再び復活したような気がしてならない。

(事務局) 広域合併をした市町村は、基本的に全ての都市機能を備えることを前提として考えているかのような動きをしている。

(委員) シビルミニマム の視点で将来の都市施設体系を再検討する必要があるのではないか。その中でどうしてもサービスの維持が困難な圏域が見えてくるのではないか。
地方自治体が住民のために備えなければならない、最低限の生活環境基準。

(委員) これまで行われてきた広域的な連携が合併によって失われつつあるように思える。コンパクトシティの観点から市町村合併の影響を評価できないか。

(事務局) 評価方法が難しいため、一度事務局に持ち帰って検討することとしたい。

(委員) 横手市の平鹿総合病院と同様、湯沢市でも総合病院が郊外移転した(雄勝中央病院)。街なかから病院までタクシーで3000円もかかる。

(事務局) 平鹿総合病院の郊外移転は高速道路や国道からのアクセス性に配慮したのではないか。高速ネットワークの整備が病院の勢力圏拡大に寄与している例もある。

- (委員) 横手、湯沢、大曲と各々に総合病院が建てられている。
ある病院は癌専門といったように、拠点化を図れないか検討したことがあるが、首長が賛同しないなどの理由により結果的に失敗した。
コンパクトシティの検討は広域的な議論が必要。
- (委員) 今回、行政担当者にヒアリングしていただいたようだが、そもそも住民自体にコンパクトシティのニーズはあるのか。
- (事務局) これからのコンパクトシティの議論を進める上で大事になるのは、誰に向けて必要性を発信するかということ。
一般市民に必要性を訴えかけていくのか、あるいは市長などに訴えかけていくのか、今回とりまとめる提言の使い道を考えなければならない。
- (委員) 市民アンケートを実施できないか。
- (委員) アンケートを行うとすれば、ある程度データを集めてから狙いを絞って実施した方がよい。
- (事務局) 単純に全市民対象のアンケート調査というのは難しい。また、これからアンケート内容を企画するとなると時間的に厳しい。
- (委員) 市町村合併した市だけでも構わないが、行政職員に対してコンパクトシティの必要性に関する意識調査を実施することはできないか。
- (委員) まずコンパクトシティがどういったものであるかを示すことが必要。それを示さないでただ調査しても何も出てこないのではないか。
- (委員) コンパクトシティという言葉にこだわらなくとも、主旨を示した上で、それに対して市民や行政職員がどう思っているのかを聞き出すことが重要。アンケートでなくとも20～30人程度でワークショップを行うといった方法も考えられる。
- (委員) まちづくり3法が改正されたことにより、郊外開発にブレーキをかけ、中心市街地の活性化にアクセルをふかす仕組みができた。市町村にとって意味のある法改正だったのかどうか、実務的な話なので聞きやすいのではないか。
- (委員) 事務局資料 p.41 の「モデル都市のコンパクトシティ像の整理」について、クラスター型コンパクトシティ(宮古市)とネットワーク型コンパクトシティ(横手市)の違いは。

(事務局) 宮古市の場合は地域拠点が複数存在し、それぞれが相互に結びつくイメージ。横手市の場合はレベルの異なる拠点同士をネットワークでつなぐイメージである。分かりにくいところがあるので、今後整理したい。

【 全 体 討 議 】

～ コンパクトシティ形成に向けた提言のとりまとめについて ～

(委員) 単純な疑問だが、中心市街地が活性化すれば自然とコンパクトシティになる訳ではないのか。

(委員) 市議会議員などは農村部選出の議員も多く、中心市街地への重点投資に対する理解が全く得られない。したがって、中心市街地の活性化は農村部にもメリットがあるということを示しながら、できるだけ中心市街地への集積効果を高めるような手法を考えなければならない。

(委員) 中心市街地の活性化、地域資源の活用などについて制度的な条件整理が出来ないか。また、市民との協同パートナーシップなど、行政サービスを維持運営していくためのシステムについて言及する必要があるのではないか。

(委員) 「コンパクトシティへの取り組みの必要性」(骨子 p.2)について、不安を煽るような書き方ではなく、このような取り組みをすればこんないいことがあるのではないかといい前向きな書き方をすべきでないか。
また、中心市街地に関する記述ばかりのように感じるので、中心部と周辺部をそれぞれ分けて記述すべきではないか。

(委員) 歴史や文化など地域の個性や誇りに訴えかけるような記述が必要ではないか。
イメージ図(骨子 p.3)について、公共交通ネットワークのイメージや考え方について記述が必要ではないか。

(委員) ヨーロッパにおけるコンパクトシティの議論では、街なかをいかに魅力的な空間にするかについて徹底的に議論している。日本はただ中心市街地を元気にするぞといった掛け声だけで具体の空間像が描き切れていない。住居、商業、職業といった複合的な機能を有する街なかの空間像を描けないものか。

官公庁施設を特定の地区に集約させる「シビックコア地区制度」という考え方があるが、公共公益施設だけではなくもう少し広い視点での検討が必要ではないか。

また、中心市街地活性化の推進母体(中心市街地活性化協議会)は民が中心となるよう法改正されたところでもあり、市民と行政のイコールパートナーシップが重要。

- (委員) 都市部と周辺部の関係性をどのように考えるべきか。周辺部の住民が都市部で都市的サービスを受けることはイメージしやすいが、都市部の住民が周辺部からどのようなサービスを受けることができるか。
- (委員) 具体的な事例を一つ挙げるならば、大崎市(旧古川市)では建設会社5社の経営者が中心となって農業生産法人(有)ヒーローを設立し、有機栽培により米を生産している。このように、農村部の潜在能力を引き出し、付加価値を付けるような事業は可能なのではないか。
- (委員) 都市と農村の共生については、東北の場合は結構事例があると思われる。山形県長井市のレインボープランの事例もあるし、福島県喜多方市のように、農林商工で一体となってイベントを開催し、各業種間の交流を行うことで地域内の産業振興を図っている事例もある。
- (委員) モデル都市の検討はどこに反映されているのか。
- (事務局) 事務局資料 p.41 で検討結果を整理し、p.42 でまとめたところだが、今回提示した骨子には十分反映されていないため、できるだけ提言の中に盛り込みたいと考えている。
- (委員) 「中小都市におけるまちなか居住」(骨子 p.6)について、マンションの写真が示されているが、単に街なかに住宅があり人が住めばいいというものではない。街並みの空間イメージや景観も考慮すべきではないか。
- (委員) 「コミュニティ」など、具体的にどういったものを指しているのか分からない人もいるかもしれないので、提言書の最後に用語集をつけてはどうか。
- (委員) 骨子 p.3 のコンパクトシティイメージ図について、どのあたりがコンパクトシティと言えるのか。
- (事務局) 中心核を半径1 kmで設定している。その周辺の黄色い区域が郊外エリアだが、将来的には縮退することを想定している。
- (委員) 山形県米沢市では、県立米沢興譲館と県立米沢工業高校が郊外移転し、街なかから自転車通学する高校生の姿が消えた。シビックコアは重要な概念であり、公共公益施設を建て替える際の指針となるようなガイドラインのようなものがあってもいいような気がする。
- (委員) 公共公益施設の郊外移転については、土地が安いとか駐車場が多く確保できるとか、理由が安易すぎる。

- (委員) 3ページのコンパクトシティ像について、目標年次に関する記述がない。先ほどの事務局資料では2030年までの人口の将来予測があるので、2030年という目標年次を入れてもいいのではないかと。
- (委員) 今の建設動向がそのまま推移すると仮定すれば、単純計算で40年から50年ですべての住宅が建て替わることになる。したがって、あえて目標年次を入れるとするならば、50年先ぐらいがいいのではないかと。居住空間は、地域の空間の大半を占め、大変な費用が投資されているにも関わらず、そのあり方についてほとんど検討されていない。
- (委員) 街なかにおける問題点は、居住継承がなされず、そのまま空き地になっていることである。
- (委員) 遊休不動産を流動させる仕組みを考えられないか。その点に踏み込めないと経済力のない中小都市の再生は小手先だけで終わる気がする。
- (委員) 委員会の目的・理念は何か、どういった目標があって、どのような整備計画が立てられるか。そして、誰がどういった役割を担い、住民はどういった責任を持つのかといったことについて整理が必要。次回までに整理しておくこと。
- (委員) コンパクトシティを考える上で広域高速道路ネットワークは重要。将来の幹線道路網計画についての資料を用意できないか。公共交通活性化のための法律が整備されるという話があるそうだが、コンパクトシティを考えるとき、周辺農村部をどのようにネットワークするかが重要。公共交通の維持に行政がどれほど補助しているか分かるような資料を用意できないか。